



第7号様式 (規程別表第1 第2項第2号ニ関係)

出張報告書

2026年7月6日

尼崎市議会議長 様

会派名 無所属  
代表者氏名 やはた オカン  
出張者氏名 やはた オカン

このたび、出張しましたので、次のとおり報告します。

1 出張期間 2026年7月4日から 2026年7月4日まで

2 結果の概要

用務先 東部港区 虎之門	報告事項 (この欄には要点を簡条書きにし詳細事項がある場合は別紙添付) 1 知的障害者インクルージョン実践センター2026 2 障害者支援施設について 3 脱施設化とは、 4 脱施設化の実践と成果と課題 5
添付書類 <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>	備考

3 届出事項の変更等  なし  あり (内容は裏面に記載)

旅費の精算

精算額は、2026年6月17日届け出た額 ( 20,240円 ) と同一額である。

届出事項の変更等により、別途精算する。(精算額は裏面に記載)

(裏面)

届出事項の変更等の内容

変更等の事項と理由

支 出 額	
精 算 額	
支出 差引 額 戻入	

変更前と後の日程

	月	日	日	日	日	日	日
前 着地							
後							
前 経路							
後							
前 用務先							
後							
前 宿泊先							
後							

# 出張報告書

尼崎市議会議員 ヤマト オカン

日時：令和8年(2026年)7月4日(土) 13:00-17:00

会場：笹川平和財団ビル11階 国際会議場

講師：ミラン・シュヴェジェパ氏

37カ国の知的障害者とその家族を代表する団体「Inclusion Europe」のチーフ  
エグゼクティブ。脱施設化の専門家

## 【概要・プログラム】

講演 13:05～

「欧州における脱施設化の実践と成果」

パネルディスカッション 14:20～

「脱施設化」は本当に知的障害者と家族を救うのか～日本の入所施設の未来を考える

## パネリスト

ミラン・シュヴェジェパ氏 Inclusion Europe チーフエグゼクティブ

小野寺 徳子 氏 元厚生労働省 障害者雇用対策課長

古川 慎治 氏 (独)国立重度知的障害者総合施設のぞみの園 理事

釘宮 謙悟 氏 (福)博愛会 副理事長 第二博愛寮 施設長

## 【概要】

講師であるミラン・シュヴェジェバ氏はインクルージョン・ヨーロッパで働き  
これまでさまざまな国で、施設から地域生活への移行「脱施設化」に取り組ん  
できました。

自分の家に住む  
友達がいる  
自分で決断する  
得意なことがある  
どこかに居場所がある

国が違ってもインクルージョンの  
基本的な原則は同じ、日常生活において  
何かやるべきこと、行くべきところがあ  
るという意味。インクルージョンが何で  
あるかの実践です。

地域で暮らすことは大切です。

なぜなら、他の人々と出会い、普通の  
生活の一員になれるからです。

仕事を見つけ、社会の中で積極的な役割  
を果たすことができます。



- ・知的障害のある人たちの多くは、自立して暮らし、地域社会の一員として生活しています。
- ・成人後の自立した生活に向けて、家族が準備を支えてくれている人たち。
- ・頼れる親族や友人、支援団体があり、互いに支え合える関係を持つ人たち。
- ・利用しやすく、手頃な価格の公共サービスを利用できる人たち。
- ・質の高い障害者支援を受けられる人たち

障害者支援サービスは、本人が自分らしく暮らし、地域の一員として生きること  
を支えるものでなければなりません。

障がい者支援がすべきこと、すべきでないこと

適切な障害者支援とは...	すべきではないこと...
障害のある人自身が主導し、支援の目的・内容と支援のかたちやフォームをきめる	その人を、あらかじめ決められたサービスの単なる「利用者」として扱うこと
本人が決めた条件のもとで、信頼性が高く安定した支援で、その基盤がしっかりしている	短期的な資金や、本人への相談なしに突然行われる事業者変更によって、本人を不安定な状態に置くこと
わかりやすい言葉を使い、支援の目的・仕組み、本人がどのような恩恵を受け、どう支援に関わることができるかを明確にする その人の経験、期待、強みを把握しようと努め、本人と彼らの希望を中心に据え、その人が人生を最大限に生きられるよう支援する	サービスの中でしか通用しない専門用語で語り、難解な言葉によって「サービス利用者」への支配を保つこと 本人の「制限」や「障害」だけに着目し、それぞれのスキルや能力の「不足」の埋め合わせをしようとする
その人が通常の社会的役割や交流を持ち、一般的に利用可能な公共サービスを活用できるよう支援することを重視する	人間関係や公共サービスを、人工的な「セラピー」や「活動プログラム」に置き換えること
本人が必要とする場所と時間に利用でき、自宅、職場、外出先、友人との旅行中など、生活の場に合わせて支援する	その人に特定の時間に特定の場所へ来ることを強いる—最悪の場合、その人を自宅から入所施設へ移住させることさえある

※ インクルージョンを阻む大きなものとして

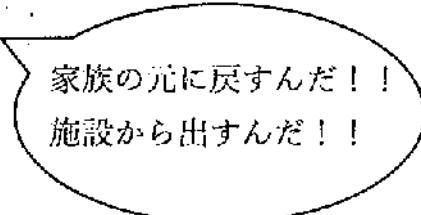
十分な支援サービスがないということ

政府が提供する義務がある

施設とは：

- ・ 障害によって人々をグループ分けする場所
- ・ 家族や友人、社会の他の人々から切り離す場所
- ・ 施設のやり方や規則によって本人の生活を支配する場所
- ・ 人々が普段おこなう日々の営みを奪い、「セラピー(療法)」や「アクティビゼーション(活動)」と呼ばれる集団活動に置き換える場所
- ・ その人が人生を経験し、社会的スキルを身につけ、人間関係を築き、年齢とともに成長し、この世界に自分の居場所を持つ機械を奪う場所

最大の障壁は、施設において隔離しているということ、人との関係性を持ってない→これらを取り払うこと→脱施設化



家族の元に戻すんだ！！  
施設から出すんだ！！

ちがいます！！

支援の仕方を変えるということ

人がある施設から別の「より良い」近代的な施設へ移すことは、脱施設化ではありません。

障害のある人たちを、同じ場所にある複数の小規模な住まいに移すことも、脱施設化ではありません。

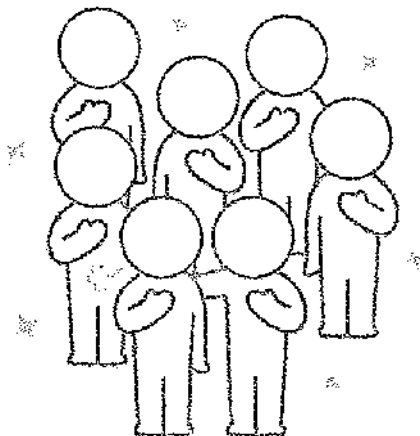
何の支援もないまま放置したり、ただ家族のもとへ戻したりすることも、脱施設化ではありません。

脱施設化とは：

入所施設から出て、自分自身の住まいを持ち、地域の中で包摂された生活を築けるように支援すること。

障害福祉サービスを変えていくこと。

つまり人々を社会から切り離し、管理するサービスではなく、その人が自分の住まいを持ち、家族の一員であり、友人を持ち、仕事をし、得意なことを持ち、地域の中で「所属している」と感じられる生活を送るために必要な支援を提供するサービスへと変えていくこと。



自分らしく暮らし、

地域の一員として

生きること



非常に興味深い内容で、それぞれの先生方の説明もありましたが、限られた時間の中で時間が足りないというのは往々にして起こることで今回もそうでした。今回の勉強会に参加して「誰のための福祉」なのか今一度考えて見ようと思いました。

障害者福祉計画はどこの自治体も取り組んでいます。

また言葉を越えてそれぞれの国で(欧州連合)EU 主導の移行で

2010年代から現在まで進められていますが、その限界も懸念されています。

施設から出て暮らすための支援を一人ひとりに合わせて整える方法は、

幸運にも支援を受けられた人にとっては地域の中で暮らすこと

(インクルージョン)を実現するために効果的ですが、一方で、とても時間がかかります。

尼崎市では、障害福祉計画でめざすこととして「障害のある人やその家族が地域で安心して生活するために、どのくらいの福祉サービスが必要となるのか、それらのサービスなどを提供していくためにどのような取組を進めていく必要があるのか」細かく示しています。

が、対応数の多さや、個々にあったサービスの提供をするには時間と多くの人

の手、また資金が必要です。

インクルージョンに限らず、充実した障害者福祉サービスの実現には多くの  
人々の理解と協力、国による公的な支援が必要不可欠だということを改めて感  
じました。